

## 国際シンポジウム

## IATSS 2012 International Workshop

## 次の時代の交通と安全

## ～東日本大震災の教訓を踏まえて～

(2012年9月20日～21日、国連大学ウ・タント国際会議場)

主催：(公財)国際交通安全学会

共催：国連大学サステナビリティと平和研究所

後援：内閣府、警察庁、国土交通省、(公財)交通事故総合分析センター、(財)全日本交通安全協会、(一社)日本自動車連盟、(公財)三井住友海上福祉財団、(公社)空気調和・衛生工学会、(一社)交通工学研究会、(公社)地盤工学会、(公社)土木学会、日本環境共生学会、(一社)日本建築学会、日本交通学会、日本交通心理学会、(公社)日本交通政策研究会、(公社)日本コンクリート工学会、(公社)日本造園学会、(公社)日本都市計画学会



▶ <http://www.iatss.or.jp/2012/11/iatss2012-internationalworkshop.html>

## 国際シンポジウム「IATSS 2012 International Workshop」

実行委員長として

谷川 武

IATSS 2012 International Workshop 実行委員長  
愛媛大学大学院医学系研究科教授



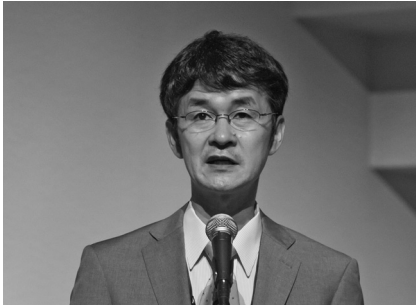
▲実行委員長／谷川 武氏

2012年9月20日、21日の2日間にわたり、「次の時代の交通と安全～東日本大震災の教訓を踏まえて～」をテーマに、国際シンポジウム「IATSS 2012

International Workshop」を国連大学ウ・タント国際会議場にて開催しました。

本シンポジウムの開催に当たり、国連大学サステナビリティと平和研究所にご共催をいただくとともに、内閣府、警察庁、国土交通省をはじめ、多くの関係団体の皆様にご後援いただきましたことを深く感謝申し上げます。

国際シンポジウムは、9月20日午前国際交流部会主催セッションとして「交通安全政策：政策変遷の国際比較」をテーマに、中国・インドネシア・台湾・トルコ・英国・米国・日本の7カ国における過去60年間の交通事故概況および交通安全施策と規制の変遷から得られるインプリケーションについて、各国の交通分野を代表する若手研究者にご講演いただきました。



▲総合司会(9月20日)／田久保宣晃氏

午後は、シンポジウム部会主催セッションとして「これからの交通安全」をテーマに、将来の交通安全の方向性について、さまざまな分野における海外の著名な学識者4名による講演とパネルディスカッションから、議論を深めていただきました。



▲総合司会(9月21日)／北村友人氏

9月21日午後は、震災特別プロジェクト主催セッションとして「非常時の交通と安全」をテーマに、東日本大震災直後より「交通」の問題を中心に、被災地の復旧・復興・創造を願って、国際交通安全学会内で幅広く検討を進めた活動を踏まえて、国内外の多方面の方にご参集いただき、多様な観点から「非常時の交通と安全」について議論を深めていただきました。

本シンポジウムの最後に、小口会長より「IATSS VISION」が宣言され、2日間延べ750名の方にご参加いただいた国際シンポジウム「IATSS 2012 International Workshop」は無事終了しました。

本シンポジウムのパンフレットに小口会長が寄せられたメッセージは、「新たな時代が拓かれるときそこには予想を超える大きな力が働いています『人の力』、『学術の力』そして『時の力』です」という一文から始まっています。まさしく、本シンポジウムは、この三つの力が結集した強力な磁場空間を形成しました。今回のシンポジウムが単なるイベントで終わるのではなく、この強力な磁場空間を共有した参加者の皆様が各々の立場でこれから新たな行動を起こしていただく契機となり、わが国のみならず、世界各国の理想的な交通社会の実現に寄与し、そして交通社会の新たな時代を拓く原動力となることを祈念申し上げます。

## 国際交流部会主催セッション

### 「交通安全政策：政策変遷の国際比較」

加藤一誠

IATSS国際交流部会企画委員会委員  
日本大学経済学部教授

本セッションでは中国、インドネシア、台湾、トルコ、米国およびわが国の交通事故と交通安全政策の変遷に関する六つの報告があった(英国のSamantha Jamson氏は急用のため欠席)。

セッションの前提となるのは、『7ヶ国における交通安全政策と規制の変遷(1950～2010年)』である。これは各国の交通事故の推移や交通安全政策の変遷を網羅した資料である。国際交流部会が想定したこのセッションの目的は、次の2点である。

- (1)共通の論題で報告、議論することによって国内外の研究者の交流をはかる
- (2)執筆者は主に若手研究者であることから、今後のIATSSに対する理解を深める

前者が国際交流事業とすれば、後者は将来への投

資という意味を持ち、目的を達するためには長期的な事業継続が求められる。

報告者は登壇順に、Hongmei Zhou氏(中国)、Tri Tjahjono氏(インドネシア)、Tsu-Hurng Yeh氏(台湾)、Ilgin Gökaşar氏(トルコ)、Anurag Pande氏(アメリカ)、小島克巳氏(日本)であり、後藤孝夫氏の司会で進行された。すでに小島氏の手によって7カ国の概要がまとめられているが、以下では簡潔にセッションの内容を要約する。

経済発展の段階は国によって異なり、それが交通事故や交通安全政策に影響を及ぼしている。例えば、米国、英国およびわが国では、データの関係で負傷者数が不明確な米国を除き、死者数、負傷者数ともに減少している。ただし、米国の死者数は2006年以



▲Hongmei Zhou氏 (中国)



▲Tri Tjahjono氏 (インドネシア)



▲Tsu-Hung Yeh氏 (台湾)



▲Ilgin Gökaşar氏 (トルコ)



▲Anurag Pande氏 (アメリカ)



▲小島克巳氏 (日本)

降減少しているとはいえ3万人もあり、英国の2,000人弱、わが国の4,612人(2011年)と比べて高い水準にある。

台湾と中国の死者数は減少したが、事故件数と負傷者数に関して中国は減少、台湾は増加と分かれた。インドネシアの死者数は2002年にかけて一度は減少したものの、2010年には3万人を上回った。ここには二輪車の普及に伴う事故件数の増加が背景にあり、台湾でも二輪車運転者の死者数が全死者数の57%を占める。またトルコでは車両保有率が低く、人口10万人当たり死者数は米国を下回るが、事故件数と負傷者数は増加している。

先進国では自動車交通の急増に伴う事故の増加を経て交通安全対策を実施し、事故件数や死者数は減少した。データを見る限り、中国にもその傾向が認められる。他の国では死者数が減少していたとしても、事故件数と負傷者数は増加傾向にあるため、今後も交通安全政策が継続される必要がある。

具体的に、トルコでは交通事故に対し路側帯を十分にとった道路整備が求められる。他方、スピード違

反、信号無視、飲酒運転などが事故原因の上位を占める中国や台湾には、自動車社会への変化についていけない人々の意識の問題があるという。そのためインフラや施設の整備とともに、運転者の訓練をはじめとする教育の果たす役割が大きいと考えられる。

各国固有の条件を除き、各国の交通安全政策にはわが国の経験が有効であろう。例えば、安全施設を中心としたハード面の整備、運転免許のコントロール、官民をあげた交通安全運動の展開をはじめとする安全思想の普及というソフト面の施策である。これらはいずれも、今後の交通安全政策の指針になり得る。加えて、わが国は高齢社会を迎えている。わが国に関する報告では高齢運転者標識の有効性が言及された。中国も今後は急速な高齢社会を迎え、他の国々もモータリゼーションを経験した高齢者の問題を抱えるだろう。そのときには市民社会も成熟していると考えられ、実施される対策には合理性が求められる。

そのためには交通統計は必須であるが、統計の問題点も明らかにされた。インドネシアでは政府と警



▲後藤孝夫氏（司会）

察の間で死者の定義に齟齬がある。台湾では警察発表データのほかに医療機関発表のデータがあり、後者の死者数は前者の1.7倍となるため、前者の過小発表の可能性が指摘された。米国でさえ、負傷者数については事故理由の報告が不正確であり、例えば、衝突事故の負傷者数は1990年代以降のみ信頼性があるという。統計の整備は交通安全政策を含めた政策の立案、評価の基礎であり、そのための投資も必要である。

## シンポジウム部会主催セッション

### 「これからの交通安全」

谷川 武

IATSS シンポジウム部会企画委員会委員長  
愛媛大学大学院医学系研究科教授

9月20日午後、シンポジウム部会主催セッションとして「これからの交通安全」をテーマに、将来の交通安全の方向性について、さまざまな分野における海外の著名な学識者4名による講演とパネルディスカッションから、国際的かつ学際的に多様な価値観に基づいた活発な議論が展開された。

最初の演者は、Ekkehard Brühning教授(ドイツ)で、講演のテーマは、「日本とドイツの交通安全—成功と失敗、そして今後の可能性」であった。日、独ともに交通安全面で大きな成果を達成してきた。近年、特に安全面の課題が注目を集めており、「道路環境および特定の道路利用者層の安全性向上と新たに開発された自動車安全技術」について大きな期待が寄せられていると論じた。

Dominique Fleury博士(フランス)のテーマは、「交通安全への地域的アプローチに関する研究」であった。1972年以降、道路の安全性が大幅に高まったが、その一方で交通事故死亡者数を減少させること

は、一層難しくなってきている。「公共空間や交通ネットワーク」の設計時に、安全性に重きを置いていないことがその要因の一つであり、このプロセスの改善に向けた条件を論じた。

次いで、IATSS海外名誉顧問でもあるWerner Brilon教授(ドイツ)は、「高速道路交通運用の信頼性」を



▲Ekkehard Brühning氏（ドイツ）



▲Dominique Fleury氏（フランス）



▲Werner Brilon氏（ドイツ）



▲David F. Dinges氏（アメリカ）



▲谷川 武氏 (進行)



▲パネル ディスカッション



▲Brilon氏、Fleury氏 (パネリスト)



▲Dinges氏、Brühning氏 (パネリスト)

テーマに、高速道路交通運用の信頼性が、今後の交通工学にとって重要なファクターになりつつあり、その信頼性を高めるためには、「交通工学的な解決法と組織的活動を組み合わせた戦略」が必要であり、これらの戦略の一層の高度化が長期的な交通パフォーマンスの向上につながると述べた。

最後に、David F. Dinges教授(アメリカ)が、「交通安全と運転者の疲労-生物学へのテクノロジーの適用」をテーマに、睡眠不足による運転者の疲労は、

交通事故件数と死者数を増大させる紛れもないリスク因子であること、このリスクの性質を明らかにしながら、『教育・新技術・交通システム設計』を通じてリスクを低減する必要性について論じた。

本セッションでは、講演中に会場からの質問を集めることを試みた。その質問に答える形でパネルディスカッションを進行することによって、会場と一体感のある議論を深めることができた。

ご協力いただいた皆様に感謝する次第である。

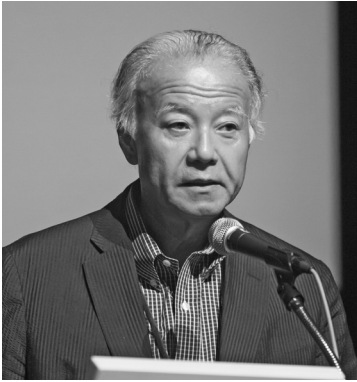
## 震災特別プロジェクト主催セッション 「非常時の交通と安全」

岸井隆幸

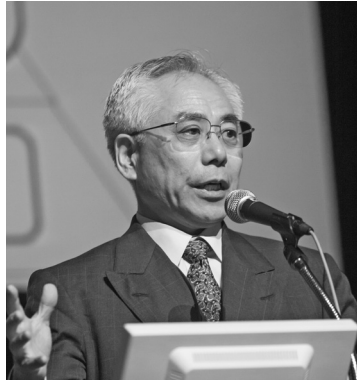
IATSS震災特別プロジェクト総括代表  
日本大学理工学部教授

9月21日午後開催された震災特別プロジェクト主催による「非常時の交通と安全」セッションでは、まず、武内和彦IATSS理事(震災特別プロジェクト前総括代表)が本セッション趣旨の説明を行い、続けて林良嗣IATSS顧問(震災特別プロジェクト総括代表代行)が昨年度、震災特別プロジェクトで行った研究の成果報告を行った。

次いで、震災直後に政府が設置した東日本大震災復興構想会議の議長を務められた五百旗頭真氏(現・公立大学法人熊本県立大学理事長、復興庁復興推進委員会委員長)による基調講演「東日本大震災の復興と教訓」が行われた。五百旗頭氏からは、わが国がこれまでどのように大災害に対応してきたか、今回の東日本大震災で何が起きたか、人々はどう



▲武内和彦氏



▲林 良嗣氏



▲五百旗頭 真氏



▲川勝平太氏



▲Sutanto Soehodho氏 (インドネシア)



▲Srikantha Herath氏 (スリランカ)



▲David F. Dinges氏 (アメリカ)

な行動をとったのか、広域複合災害である東日本大震災の復興の特徴と今後取り組んでいかなければならないさまざまな課題、そして復興構想会議が提言書「悲惨のなかの希望」でうたった「創造的復興」という概念などについて解説をいただいた。

その後、パネルディスカッションに移行したが、最初にパネリストから自己紹介も兼ねて簡単な問題提起のプレゼンテーションをいただいた。具体的には、まず静岡県の川勝平太知事から、静岡県がどの

ように災害対策に取り組んでいるか、山沿いに位置する第二東名高速道路を活用した防災まちづくりの動き、市民を巻き込んだ防災や避難に関するさまざまな訓練の取り組み、静岡空港を利用した基幹的広域防災拠点の構想などについてご紹介をいただき、次にIATSS海外招待会員でもあるインドネシアのSutanto Soehodho氏（ジャカルタ首都特別州貿易産業交通担当副知事、インドネシア大学工学部教授）から「ジャカルタ大都市圏での災害リスクとその解決策」と題して、ジャカルタ大都市圏が直面する交通事故の増大、スラムエリアを中心として頻発する火災、2007年にも起きた大洪水といったさまざまなリスクに対して、ジャカルタがどのように対処しようとしているかをご紹介いただいた。

そして国連大学サステナビリティと平和研究所シニアアカデミックオフィサーのSrikantha Herath氏からは「巨大災害のマネジメント」と題して世界各地で起きている災害の現状（この40年間で被害額は7倍に増加。ただし洪水に限ってみると頻度はそれほど変わっていない）、2004年のインド洋津波によるスリランカでの被害と今回の東日本大震災による

東北地方の被害との比較、巨大災害を意識した「減災」に向う対応方策などについてご解説いただき、加えて、前日午後に行われたシンポジウム部会主催セッション「これからの交通安全」に登壇されたアメリカペンシルベニア大学教授David F. Dinges氏より昨日のセッションで行われたディスカッションのご紹介と「非常時と平常時」の違いをご発表いただいた。



▲パネル ディスカッション



▲岸井隆幸氏（進行）

その後は、先に震災特別プロジェクトの研究成果報告を行われた林良嗣氏も交えた4人のパネリスト討論に進み、討論では最初に各パネリストのプレゼンテーションを受ける形で、まず林良嗣氏からコメントを頂き、さまざまな災害に対する心構えの大切さ、今後アジアの国々でも進行して行く高齢社会における災害対策のあり方（東日本大震災では死者の

53%が65歳以上）、ハードとソフト（情報提供やコミュニティの力）を組み合わせることの重要性、教育やアセスメントを通じて災害そのものを理解する力の必要性、などが幅広く議論された。満席に近い会場の参加者からも質問、意見をいただいたが、時間の制約もあって多くの方のご意見を直接うかがえなかったのは残念であった。

こうしたパネリストによる討論は必ずしも結論を求めるものではないが、非常時の行動については、日頃から想像力を高めること、心構えにつながる知る力（アウェアネス）を高めることが重要であるといった点は多くの参加者から同意を得られたところである。



▲小口泰平氏

パネルディスカッション終了後、最後に、今回の国際ワークショップのまとめとして、小口泰平IATSS会長が、今後広く世界に向ってIATSSはどのように貢献してゆくか、IATSS活動のこれからの方向性を指し示す「IATSS VISION」(p.94)を発表された。「科学技術」と「人間」が創り出す「新しい交通社会」を目指して、学際的・国際的活動をより一層強力に推進すること、ハードウェアとソフトウェアの協調に加えてマインドウェアを磨くことが必要であることを力強く宣言された。このIATSS VISION宣言は、閉会后、会場に参集されたすべての方々に配布され、広く共有されることとなった。

## 【IATSS VISION】

## IATSS VISION

＜ 震災に関するこれまでのIATSSの活動に対する総括と展望 ＞

**理想的な交通社会の実現に向けて  
技術の規範はもとより  
従来の枠組みを超越した学際性の大切さがクローズアップされている  
特に大震災からの復旧を越えて  
復興を目指す安全・安心の交通社会の創造には  
様々な学問分野・技術分野がその領域を超えて  
目的主導の英知の結集に努め  
その意義と道筋と施策を見出すことが肝要である**

**IATSS (国際交通安全学会) は、  
「科学技術」と「人間」が創り出す「新しい交通社会」をめざして  
ハードウェア、ソフトウェア、マインドウェアを拓く  
学際的・国際的活動を、より一層強力に推進することを世界に宣言する**

かつて IATSS創設者 本田宗一郎氏は語っている  
「最大の光栄は 一度も失敗しないことではなく 倒れることに起きあがるところにある」  
IATSSそしてわれわれは 世界から寄せられた善意に応えるためにも  
東日本大震災を乗り越えて さらに前進することをここに誓う

**平成24年9月21日**  
公益財団法人**国際交通安全学会**  
**会長 小口 泰平**